

第 1 章

鳥獣被害と対策技術の基本

1 鳥獣被害との苦闘の歴史

古くから人々は、イノシシやシカなどの農耕地への侵入を防ぐ対応に精を出してきました。人々にとって、農作物に大きな被害をもたらす獣害は死活問題にもなりました。人々は、山中・山麓の田畑に小屋を作り、毎晩、寝ずの番をして獣の侵入を防ごうとしました。大声をあげ、また猪笛といわれる笛を吹いたり鳴子を引いて大きな音を出し続けることは、日中に田畑の仕事をしななければならない人々にとって、その辛苦はたいへんなものでした。しかし、自分の田畑は自分で守るといのは、基本的なことでした(図1)。

人々はさらに、シシ垣といわれるイノシシやシカの侵入を防止するための防護柵を作りました。現代の金網柵やワイヤーメッシュ柵などにあたるもので、江戸時代には、長さ10km以上にわたって石や土を積んで作った大規模なシシ垣が作られました。万里の長城を思わせる、このようなシシ垣は、集落の全戸が協力して作ったものであり、維持管理も全戸で行いました。

2 被害を徹底的に防ぐという覚悟を

我が国では、獣害への対処は時代を越えて続く重要な課題であり、現代版の取り組みが急務となっています。

シカや、イノシシの子であるウリ坊などは一見かわいいし、被害を受けてもその姿を見るとつい情に負けて許してしまいそうになります。サルのように人間に近い動物ではなおさらです。しかし、農林水産省によると「野生鳥獣による農作物被害額は230億円(平



獣害に対処した人々の団結の象徴であるシシ垣



シシ垣に併設された捕獲用の落とし穴

(注) 捕獲用の落とし穴は、現代では禁止されています。



図1 斐太後風土記巻之八「山畑夜守」

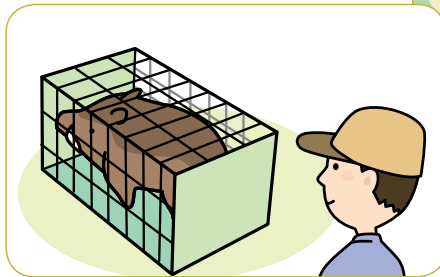
このようなシシ垣を見ると、獣害には地域ぐるみの団結が必要となることがわかります。

シシ垣には、落とし穴も併設され、田畑に近づくイノシシやシカの捕獲も行われました。人々にとって、落とし穴に入ったイノシシやシカは農作物に被害を与え、憎き敵ではありましたが、食肉などにもなりました。

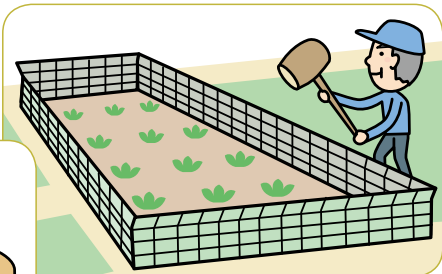
イノシシ、シカ、サルなどが生息する山地部が多く、それらの山間や周辺に農業的土地利用や居住地に適する平地や緩斜面が存在するという地理的条件下にある

成24年度)にもものぼり甚大な被害です。

これまでも様々な対策が取り組まれてきましたが、被害はなかなか減少していきません。野生動物と直接対峙する農山村が人口減少、高齢化などにより疲弊するとともに、そのような社会状況の中で野生動物対策を推し進めるための考え方や体制が整っていないといったことが主な理由です。また、シカやイノシシについてはこれまで考えられていた以上に多くが生息していることもわかってきました(図2)。林業や生態系にも影響を及ぼすシカについては、森林内での個体数調整が必要ですが、いずれの動物についても農地や農地周り、人の居住地域ではという条件で、「獣害は病虫害と同じだ」という意識での対策が必要です。病気や害虫の被害を防ぐには、農地の環境を整備し作物を健全に育て病害虫を寄せ付けないこと、もし発生したら早期発見早期対策で被害を最小限に抑えること、これが当たり前の農業技術としての農家も実践しています。これと同じ考え方で、野生動物の被害にも対応する必要があります。



捕獲で駆除して生息数を減らす



防護柵で侵入防止



農地や集落から追い払う(農地は危険! エサ場と思わせない)

野生動物による被害を防ぐには、

- (1) 誘因除去⇨野生動物の食料となるものを管理・除去
- (2) 予防⇨農地に接近侵入させない(防護柵設置)
- (3) 捕獲⇨加害する野生動物を駆除する

この三つの対策を徹底すること。

加えて、農地や植林地周辺での捕獲も必要な時代になってきました。農地に入ろうとする個体数を減少させることで、柵が破られるリスクを軽減させ被害を防ぐ効果を発揮します。それだけ野生動物の個体数が増えていくという危機的な状況にあるわけで、被害対策では大胆な発想転換が求められています。

サルは、侵入してくる前に追い払いなどの防除を行い、それでも被害が軽減できない場合は捕獲を考えます。

※林業の場合は生息地での対策になるので長期的に、広範囲にわたる対策を講じる必要があります。

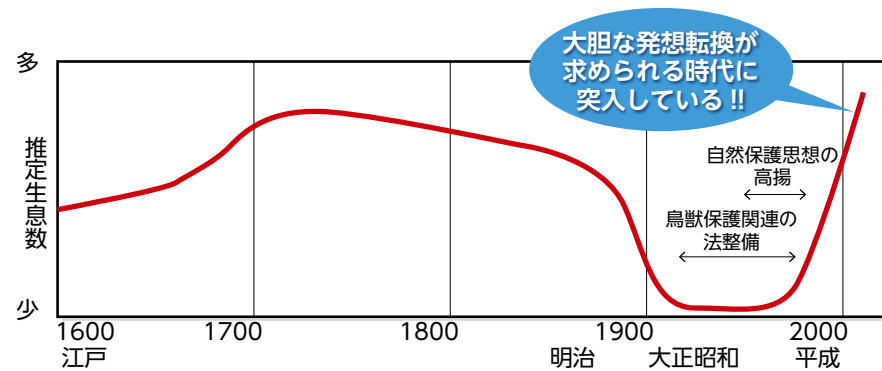


図2 シカの推定生息数の変遷 (小山原図を改変)

3 野生動物の目線に立って 侵入防止と捕獲を

野生動物の被害を防ぐには、放棄果樹や廃棄農産物など、野生動物を集落に不用意に誘い込んでいるものを除去するなどの適正な管理が欠かせません。

とはいえ、最も直接的に野生動物の被害を防ぐ方法と言ったら、侵入防止のための「防護柵の設置」と「捕獲」でしょう。農作物を荒らされたくなければ、野生動物を「農地に入れない」のが一番ですし、農地に入ろうとする野生動物の「数を減らす」ことで侵入リスクを軽減させることができます。

この二つの対策には技術が必要です。柵ならどんなものでも良いという訳ではありません。どのような方法で野生動物の侵入を防ぎ、またどのように捕獲するのが大切です。野生動物にとって、何も防御策を講じていない農地は、安全でしかもおいしいエサが手に入る食事場所です。一度農作物の味を覚えたら、できる限りの能力を使って侵入をはかります。

- ① 農作物の味を覚えさせない
- ② 潜り込めるとは思わせない・飛び越せるとは思わせない
- ③ しびれない電気柵は設置しない

(十分な電気ショックを与える電圧を保つこと)

野生動物は、一度農作物の味を覚えてしまったらその味に執着し、繰り返し侵入を図ります。チャレンジを繰り返すことでやがて突破法を見つけ、侵入してきます。

また、電圧が低く「しびれない」ことを学習した野生動物は、電線(柵線)の存在に慣れ、いちいち鼻で確認しなくなります。シカやイノシシの外皮は電気を通しにくいので、電気ショックをほとんど受けずに農地に侵入してしまいます。

(2) 捕獲

捕獲には、(1) 箱わな、(2) 囲いわな、(3) くりわな、(4) 銃器による方法があります。

集落で取り組むには、「わな」による捕獲法がハ

「防護柵」や「捕獲」を効果的に使うために、野生動物の生態や習性に関する知識が役に立ちます。野生動物の目線に立って対策を行うことで、大切な作物や生活をみんなで守りましょう。

(1) 防護柵

防護柵には、農地を個別に囲う柵だけでなく、複数の農地を囲うグループ柵や集落全体を囲う柵があります。最近では集落柵を選択(設置)する地域が増えています。集落全体で野生動物の侵入を防ぐことができ、たとえ侵入してもどこから入ったかが分かりやすく対策が立てやすいのが特徴です。

柵の種類には障壁によって侵入を防ぐ物理柵(ワイヤーメッシュ柵/金網柵/トタン板/ネット柵など)と、学習効果によって侵入を防ぐ心理柵(電気柵)があります。よじ登りが得意なサルによる被害がある場合は、この2つを組み合わせた複合柵が有効です。

ただし、設置にあたっては野生動物の目線に立った3原則を守ることが重要です。

ドルが低く効果的です。「わな」の種類と特性を知り、シカやイノシシの生息状況や環境によって種類を選びます。

わなを設置すれば必ず野生動物を捕獲できるというわけではありませんが、基本手順に従って作業を進めれば誰でも捕獲することが可能です。狩猟経験者に学び、捕獲経験を積むことで、効果的な設置場所の選び方、餌付けのコツ、そして安全で効果的な殺処分方法を体得できるようになります。

銃器による駆除は、江戸時代から有効な方法として行われてきました。最近注目されているシャープシューティングもその一つです(63頁)。被害をもたらす複数のシカをエサでおびき寄せ、全頭を駆除するというものです。これには専門の高度な知識や資格(射撃の技術・猟銃許可)、効率的な運用のための体制づくりが必要です。

以下、対象野生動物別に具体的な方法を紹介します。なお、サルについては、「集落はエサ場ではなく、人間はこわい敵だ」と認識させて山に帰す「追い払い」を中心に解説し、「捕獲」を補足しています。

休耕地や耕作放棄地、放置された果樹園や 竹藪の管理も欠かせない

休耕地や耕作放棄地では、野生動物のエサ場や隠れ家にならないように、定期的に雑草を刈るか、耕耘をして雑草の生育を抑えることが大切です。

人手だけでは十分な草刈ができない休耕地や耕作放棄地は、家畜(牛や羊など)を放牧したり、防護柵で囲んだりする方法もあります。



短角牛を荒地に放牧してみたら（岡山県高梁市増原地区）

① 放置された耕作放棄地 → ② 2年で約3haの水田がよみがえった

放置された果樹園や竹藪も伐採したり有効活用を図り、野生動物を近づけない工夫が必要です。